

イベントのご案内

おとなも子どもも体験する 考古学教室⑥

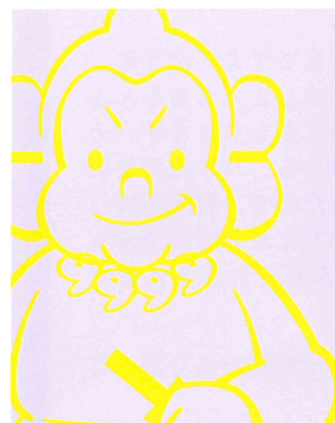
日時 平成23年2月27日(日)
8:45集合 17:00解散
集合場所 文化パルク城陽正面玄関前
行き先 兵庫県立考古博物館
史跡大中遺跡
対象 小学生以上
(小学生は保護者同伴)
定員 30名
詳細は資料館までお問い合わせください。

手作りワークショップ③ 布のコサージュを つくろう!

日時 平成23年3月12日(土)
13:30~16:00(受付13:00~)
場所 城陽市歴史民俗資料館 工作室
講師 資料館職員
対象 小学校高学年以上
定員 20名
針と糸を使って、布でお花の形の
コサージュをつくります。
詳細は資料館までお問い合わせください。

勾玉をつくろう!

1月22日(土)・2月26日(土)
3月26日(土)の13:30~16:00
※小学3年生以上
※予約は不要です。時間内に資料館
受付までお越しください。



五里ごり館通信

平成22年12月15日 第2号
(2010年)

五里ごり館

城陽市歴史民俗資料館(文化パルク城陽 西館4階)
〒610-0121 京都府城陽市寺田今堀1番地
TEL 0774-55-7611 FAX 0774-55-7612



あそ 遊ボックス × まな 学ボックス

内容が
新しく
なりました!!



歴史を遊びながら学ぶ体験キット
「遊ボックス×学ボックス。」
毎日多くの子供たちが来館し、賑わいを見せています。



平成22年度拡大特別展

Japan blue



生活の中に息づくものたち

平成23年(2011年)
1月5日(水)▷3月21日(月・祝)

昔から人々は衣服を染めるために動植物・鉱物などの身近な素材の中から染料の色素を求めてきました。特に藍は、三原色の一つである青色を作り出すことのできる数少ない染色原料として、古来より大変珍重され、今日も藍染の手法は絶えることなく受け継がれています。
今回の展覧会は「第一部 藍 - 本田洋子コレクション -」「第二部 藍 - 染織の世界 -」の二部構成となっています。人々を魅了し続ける深みのある藍色「ジャパンブルー」の世界をお楽しみください。

文化財講演会(参加自由・無料)
平成23年3月6日(日) 13:30~16:00
寺田コミュニティセンター会議室

「本田洋子コレクション
- 藍の型染の半褌袴と腰巻 - について」
奥村萬亀子氏
(京都府立大学名誉教授)

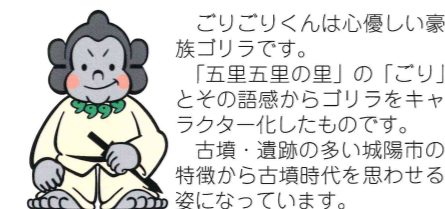
「消えてゆく藍の型染」
本田洋子氏

匠の技実演(参加自由・無料)
平成23年1月30日(日) 13:30~15:30
寺田コミュニティセンター会議室

型紙の彫りの実演
野村幸雄氏
(有野村松型紙店 三代目当主)

■開館時間 午前10時~午後5時
(入館は午後4時30分まで)
■休館日 月曜日(祝休日の場合は開館)
祝休日の翌日
(土・日曜日の場合は開館)
12月28日~1月4日

■交通案内
近鉄京都線寺田駅下車 東口より南へ450m
JR奈良線城陽駅下車 南西へ1300m
※JR城陽駅から市内循環バス有り



資料館マスコット「ごりごりくん」

■観覧料 おとな200円(140円)
小・中学生100円(70円)
<団体料金> おとな160円(110円)
小・中学生80円(50円)

※団体は20名様以上
※()内はプラネタリウムとの共通観覧の場合の資料館観覧料
<次の方は観覧料が免除されます>
★城陽市内在住の小・中学生
★城陽市内在住の65歳以上の方
★城陽市内在住の身体障害者手帳等をお持ちの方
★城陽市外の小・中学校の団体観覧(但し、児童・生徒のみ)

第一部 藍-本田洋子コレクション- 【特別展示室】

市内在住の本田洋子氏の藍の型染コレクションを紹介いたします。今まで決して脚光を浴びることのなかった庶民のつましやかなおしゃれや遊び心、また型染の文様の多様さをお楽しみいただけます。



短冊に松葉と七宝文型染半褌袴 本田洋子氏所蔵

第二部 藍-染織の世界- 【常設展示室】

第一部の本田洋子コレクションをより理解していただくため、藍の型染や筒描、京型紙などの資料をご紹介します。藍の染織の世界をお楽しみください。



唐獅子牡丹文筒描布団地 八尾市立歴史民俗資料館所蔵



鶴丸文型染布団地 八尾市立歴史民俗資料館所蔵

本田洋子さんに聞きました



本田洋子氏
1934年生まれ
1957年奈良女子大学文学部卒業
1980年頃より染織に親しむ
1999年著書『藍の型染』
光村推古書院(株)より刊行
城陽市在住

大塚 まず、コレクションをはじめられたきっかけは何ですか？

本田 昔から布に興味があって、機織りや草木で糸を染めたりもしました。糸から布が生まれるすばらしさ、草木から色が染まるすばらしさ。そういう昔の人の苦心を知るようになって、それで古い布がみたいと思って弘法さん(東寺)なんかを歩いて巡るようになりました。そんなときに、ふと見たら小さい布が行李の中に入っていて。でもこんな木綿で藍染の花が染められている布を見たことがなくて…。これはどういうものなのかなあと興味を持ちました。それが収集の始まりです。

大塚 小さな時から布に慣れ親しんでおられたのですか？

本田 ずっと遡れば、私の祖母は、お正月に着る着物をよく縫って来ていました。それで、小さいときからいいなあとと思って、お手玉なんかも縫ってもらって、遊んでいました。今でも頭に浮かぶほどうれしかったことを覚えています。ですので、布については昔からあこがれの心がありました。

大塚 コレクションは300点を超えています。どのようにして集められたのですか？

本田 弘法さんや北野さん(北野天満宮)でよく見ると、あちこちの店にパッチワーク用に小さく切って綴ってある中に、この小文様の藍染の袷が混ざっていることに気づきました。弘法さんの女店主に「切ってもらってこられるんですか？」と聞くと「そうですよ。私も切るのはあんまり気がすすまないのですよ。」と言っておられたので、「そのままをわけていただけませんか？」と言うと「わかりました」といって、次にそのあたりを歩いていると「もしもし」と呼び止められるようになりました。それからは弘法さんで大体この店とこの店とこの店とのぞき集めるようになりました。

大塚 型染といえばやはり文様だと思うのですが、特に興味をもたれた文様はありますか？

本田 本当にいろんな文様があって、こんな文様かわいいなあと買って買っていました。

花とか蝶とか、蝙蝠なんかもあるんですよ。次々違った文様が見つかったら、うれしいでしょ。もちろん古典的な蹴鞠とか、福良雀とか、扇とかもあります。そんな中で傘の文様は、古い形の傘から、ハイカラな形の傘もあって、わりあい多くあったので、興味を持って追いかけて集めていましたね。あとこれらの型染が本物であるかが、染めてある点を見るとわかるんですよ。

大塚 染めてある点？文様を染める型紙の送り星のことですか？

本田 そう。それが型染であるかどうか、染めてある点を見つけるとわかり、昔のものだなあと思いました。布を見るとき、送り星を一応確かめました。それと時代を少しでも遡れる資料をと苦しめました。

大塚 染めや織りなどいろんな布があるなかでなぜ藍の型染だったのですか？

本田 不思議な縁ですね。他にも魅力的な布はあったのだけど…。集めているときに「もうちょっと綺麗なものを集められてはどうですか？」と言われたことがあるんですよ。でもそれらはなぜか私は魅力を感じないんです。何かかわいってという感覚、可憐さ。手紡ぎの厚みのある布の温かさ、深い藍で型染された人目にはつかないつましい喜び。わっとしてなくてね、だからやっぱり惹かれました。そんなとき、この布が次々切られていく現状を目の当たりにし、こんなめずらしいものがなくなってしまうというせっぱつまった気持ちでここまでできました。

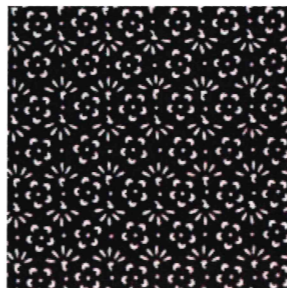
大塚 最後に展覧会を開催するにあたって何かメッセージをいただけませんか？

本田 そうですね、家で機を織っていたような時代の人たちが着物の下に着ていた、ささやかな歴史の一つですけれども、心にちょっととどめていただければうれしいです。

平成22年11月9日(火) 本田洋子氏宅にて
司会進行/学芸員 大塚 朋世
写真撮影/主任学芸員 薄井ゆみこ



インタビューの様子 左 本田洋子氏 右 大塚朋世



型紙とは小紋、友禅、浴衣などの柄や文様を生地に染めるのに用い、美濃和紙を柿渋で張り合わせた紙(型地紙)に彫刻刀で、細かくて精密な柄を彫りぬいたものです。



「最初の一彫りは特に慎重に彫らないと、一番失敗しやすいところ。型彫り職人は目が命で近眼の人の方が向いていますね。」

匠の技を見てきました! 型紙の世界

現在開催中の「藍-生活の中に息づくものたち-」で(有)野村松型紙店所蔵の型紙を展示しています。



(有)野村松型紙店
三代目当主 野村幸雄氏

明治36年に初代野村松太郎氏が小倉屋庄七氏(京小紋型紙彫刻)に師事し、大正3年に野村松型紙店を創業。二代目忠雄氏より引き継ぎ、小紋型を中心に今までは複数の職人がいなければ彫れなかった柄もすべての彫刻技法を用い型を彫ることができる。



「型紙は大きさや文様によっては2ヵ月かけて彫ることもあります。最近は集中力が落ちてきましたがそれでも一日6時間くらいは彫ります。一度彫りはじめると席を簡単にはたてません。できるだけ手の届く範囲に必要な道具を並べておきます。」



「道具彫りに必要な彫刻刀はすべて自分でつくりストックしておきます。」

イベント 開催報告

対話する鑑賞会

一言による視覚障害者とのワークショップ

2010年8月8日(日)、当館では『対話する鑑賞会一言による視覚障害者とのワークショップ』を開催しました。この事業は、視覚障害の有無にかかわらず、様々な「鑑賞者」と一緒に展示を楽しむワークショップ(以下WS)として企画しました。当日は、幅広い世代の参加者が集まり、視覚に障害のある方10名、晴眼者の方21名でWSを開催しました。WSのスタイルは、視覚障害者1名、晴眼者2名を1組として、グループごとに資料を対話しながら鑑賞する形式で行いました。参加した方々は、最初はとても緊張気味でしたが、自己紹介から徐々に「対話」を深めて、和気あいあいとした雰囲気で開催鑑賞を楽しんでいる様子でした。

今回のWSでは「触る鑑賞」ができる資料を5点ほど用意しました。視覚障害者の方からは「対話による鑑賞」でイメージが膨らんだあとに「触る鑑賞」を行うと、資料へ



平成22年度夏季特別展
「Japanese Design & Culture 商いの顔」
を鑑賞するWSの様子

の理解が深まったという意見がありました。そして「触る鑑賞」が加わることで、グループごとの「対話」をより引き出す効果もありました。

グループごとの鑑賞のあとは、展示担当が資料解説を行い、最後に感想会を開催しました。参加者からは「抜群のチームワークで楽しむことができた」「一人で見るよりも時間をかけて鑑賞することができた」「(視覚障害者の方から)質問を受けることで、自分の理解が深まった」「同じものを見ていても、3人それぞれ違った見方ができていて楽しかった」という感想があり、コミュニケーションから「見る」「聞く」「伝える」面白さや難しさを体験する時間を作ることができました。また「(ヘルパーの方ではなく)初対面の人たちと鑑賞する時間が新鮮であった」という意見もあり、障害がハンディキャップとなり資料館に足を運ぶ機会が難しかった方々からも次回の開催を要望していただけWSとなりました。

このWSは当館における新しい試みでしたが、反省と課題を活かし、今後も企画を考えていきたいと思っております。乞うご期待ください。(学芸員 西谷美紀)